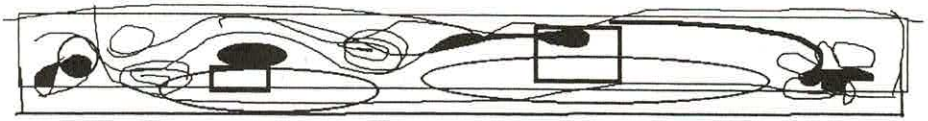
村野次郎創刊

香蘭

2025年（令和７年）８月号

第102巻　第８号　通巻1136号

二〇二五年（令和七年）八月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第一〇二巻第八号



香　　蘭

2025年（令和７年）８月号
第102巻　第８号　通巻1136号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（120）……鈴木順子……表二
近詠十五首　刺繍……藤本佐知子……2
作品　一……4
二……24
三……30
推薦香蘭集……36
香蘭集……37
作品一　十首選（六月号）千々和久幸選……14
作品二・三　十首選（六月号）桜井京子選……16
村野次郎への旅（184）昭和期の「香蘭」（十九）……千々和久幸……18
続・酔風船（20）さらば長嶋茂雄……千々和久幸……20
一頁公論（51）もう一度訪ねたい所―沖縄の伊是名島……大美賀一雅……21
会沢ミツイ「浮き雲ひとつ」評（六月号近詠十五首）……桜井京子……40
七首抄（六月号）……渡辺（礼）・三澤・奥田（富）・城……41
エッセイ・自由研究　再び『壜と思慕』を読む……江口絹代……42
焦点（六月号）春の花が詠み込まれた歌……牧野道子……44
作品評（六月号）　作品一……岩田明美……46
作品二……和田羊子……48
作品三……小笹岐美子……50
香蘭集……市川義和……52
緑地帯……柏原貞雄・大貫美奈……54
明宝研究会　第一六四回　五月例会　作歌力・批評力をつける……中島由美子・塩田文子……56
他誌拝見　140……伊藤康子……60
歌会及び会合・会員消息・他……62
編集後記・新宿日記……66・表三
表紙絵……山口蓬春「桔梗」　目次・緑地帯カット……和田和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（120）

八重桜咲きはなやげど風ありて
それしひとひらこころにのこる

『角筈』

鈴木順子

職業柄、専門書や学会誌が並ぶ私の本棚とは異趣なる母の本棚にそれはありました。

歌集『角筈』です。その背表紙は四角四面の字体で、もし私の本棚に並んでいても、何ら違和感のないように思われました。

『角筈』の読み方は？　意味は？　私は手に取り、ページを繰っておりました。

掲題歌（昭和五十一年作）は風景をただ写生するのではなく、そこに動きがあり、心のざわめきがあります。すると心に言葉が湧き出し、それが消える直前を捉えています。

鋭い感性と知性による上品で軽やかな表現は、無理のない言葉の選択とさわやかな詩情に貫かれており、心に沁みます。

この歌集『角筈』から伝わってくる凛としたたたずまいは、何とも言えず幽玄で感動的です。私にとって、日本語の奥深さへの案内書と思っています。

（『村野次郎全歌集』418頁『角筈』）

刺　繍

藤本　佐知子

ゆくりなく同級生の奥さんが刺繍講師と知りてときめく
還暦を過ぎての手習い始めたり本気半分遊び半分
六名の同級生が意気込みて月に二回の手解き受ける
よく出来たあら失敗だと燥ぎつつ完成すれば自信となりて
温かき指導のもとにそれぞれのペースで刺しぬひと針ずつを
巧拙は言わずもがなよ豊かなる個性となりぬそれが一番
時々は昔話に花が咲き手よりお口が達者となりて
自慢なる手作りおかずを持ち寄りてランチタイムは料理の時間
二月には公民館のフェスティバル集大成の御披露目である
作品はテーブルクロスやバッグなど春爛漫のタペストリーも
各々が丹精込めた自信作飾れば人気コーナーとなる

近詠十五首

研鑽を積まんと連れ立ち銀座まで足を運びき作品展へ

突然のコロナに襲われ悔しもよ余儀なき自習に籠もる日続く

中断は恐ろしきもの押しなべて気力体力じわりと奪う

おしむらく解散となる花咲けばまた懐しく思う日あらん

ひと言随想

アウトドア派の文系

どうでもいいことで気にせず過ごしてきましたが、突如自分は理系か文系かが気になりました。というのは、短歌は理系の人の方がうまいとの話を思い出したからです。ならば自分は文系に決まりです。が、趣味の刺繍を習っていた時、意外にも「さっちゃんが刺繍やるとはねえ」と昔ながらの級友に言われ、強ち(あなが)文系と言えなくもないかと思ったのです。友の評価と自分なりの思わくから「アウトドア派の文系」が正答ではないかと結論づけました。

やっとのことで月例作品を提出しているところへ「近詠十五首」をと縁なきはずの通知が届き、驚き戸惑いました。

暫く経ってこれは栄誉な事だと思い、自分を支え励ましてくれた級友との刺繍の事を詠んでみようと思いました。自己満足の作品になってしまった感が否めません。

四選者の作品

千切れ雲　　平塚　千々和　久幸

きみもまた千切れ雲なり気紛れな風に煽られ離れ行きしが
丘越えて吹きくる風はアゲンスト　われ思うゆえわれは抗う
転た寝をしながら今日も生きている　鳩よおまえに未来はあるか
人生は短かけれども一日が長く思えて黄昏のくる
朝刊を読む前にすることがある　歯は磨いたか鍋洗ったか
金曜日は「よこすか海軍カレー」にて至誠に悖ることのしばしば
「絶対矛盾的自己同一」とて弁明は苦しかりしよいつの場合も
どちらまでお出掛けですかと背後より亡妻に問われて靴紐結ぶ

桃缶　　東京　桜井　京子

くだけ散ることは思はず噴水は上へ上へとあがつて落ちる
東映の映画のはじめの荒波をおそろしと見き犬吠埼とぞ
をさな児のまへを過れる冬の蛾よこんな感じに戦争は来る
黒ぐろとアボカド積まれここに死のあるはずもなし買はれてゆけり
話しても分かり合へないこともある然う理解するまでの歳月
道の辺のうす紫はショカツサイ五丈原に果てし人の心よ
ひと日きて遊びゆきたるをさな児の飛び立ちさうな折り鶴のこる
もう子らは頼りても来ず桃缶を夫と分け合ひ春宵ふかし

YOKOSUKA　　横浜　渡辺　礼比子

かがやける線路の果てに駅のあり　赤き電車が轟然と過ぐ
入眠剤ひと月分を収めたる袋提げゆく青葉照る街
わが指の棘を抜かんと夫執すわが存在をついに忘れて
つつましくスイカズラの花匂いおり谷戸の階段崩えいるあたり
母あらぬ里発ちくれば夕焼けの空にどっしり水の塔あり
五月二十日朝日夕刊見出しなる「リテラシー」「コネクト」「バウンダリーズ」
横須賀港ヴェルニー公園バラまつり〈プリンセスアイコ〉いまし盛れる
「アメリカの潜水艦です」よこすか湾軍港ガイドの声の明るさ

全国大会にて（一）　　鎌倉　高畠　憲子

大会の前日にすつくと咲き始む無事を祈るがごとく菖蒲は
香山先生の庭より来たるこの菖蒲　頼むわよの声今も聞こゆる
聖橋ことしも渡る百二年目となりたる香蘭の一人として
〈有難うお前が居るから〉と詠む歌のお前は女房お前は短歌
解釈になづみてをれば代表の助け舟来る適時打のごと
代表の駄洒落三発拝聴し討論会のお開きとなる
ひらがなは父に習つた　ひらがなの多い葉書を今父が書く
父の老いを詠める拙歌に賜れる評文あれど父には見せず

作品一　十首選

（六月号作品から）

千々和　久幸　選

・執着は愛にはあらず夕焼けのポストはどこかへ行きたいと言ふ

桜井　京子

一、二句のドグマ（独断）が一首の核心だが、そのドグマの行く先はポストに託されている。だがポストはそんな理屈を聞くくらいならどこかへ行った方がマシだ、と外方を向いている。ついでに「執着は恋であって愛ではない」と言うかも知れない。

なかなかに心憎くまた意味深な議論の材料を提示してくれたものだ。つまりこんな答は、作者の信念か諦観（達観）かあるいは体験的実感、はたまた悪戯心に基づくものだから、黙って聞くに如くはない。読者が問われているのは、愛は執着などとは遠いところにある「断念」や「忍耐」を含むものだということか。ポストに聞こうにも、肝腎のポストは狂言回しだから、日が暮れてしまえばお役御免になる。ねえどうしよう！

もとより愛のかたちは千差万別、愛に答などないことを承知のうえでの揚言である。作者の仕掛けた罠に引っかかりそうになって危うくスキップをしたところだ。

・雑踏は同じ孤独が列をなす顔に当たって消えてゆく雪

中村かよ子

雑踏という顔と顔のごった返す場所こそ、もっとも孤独の感じられるところだという。いわゆる「群衆のなかの孤独」を捉えた。この発想も前の桜井作品と同様に作者独自の哲学の上に成立しているが、こちらには既視感があってさほどの驚きはない。

さはさりながらお手柄は雑踏を「消えてゆく雪」に重ねてみせたところにある。雑踏も雪も感傷のいとまもなく瞬時に消えてゆく。作者はその瞬時を凝視しているのだ。

・息子の去りし弥生の部屋は夫のつく溜息ふえて少し膨らむ

満木　好美

かつての「黄金家族」は子ども達が家を出て独立し、現在は作者夫婦だけになった。それだけに夫のつく溜息もじかに聞こえる。そしてそれが今はがらんとした部屋の彩りになっているのだ。

「少し膨らむ」はその実感を言葉にしたもので、説得力がある。子供が成長するように、作者にもこれまで見えなかったものが見えるようになった。この空洞にこの先どんな言葉を与えるのか、読者にとって作者の今後の歌境の深まりが楽しみである。

・電報のように言葉は短くて息子の返事はいつもすげない

宮原　迪惠

電報と言えば反射的に思い出すエピソードがある。明治9年10月の神風連の熊本鎮台襲撃事件がそれ、攻撃を受けた熊本鎮台司令官陸軍少将種田政明（死傷）とその妾小勝の現状を知らせる電報のことだ。事件直後に小勝が東京の親元に打った電文が「旦那はイケナイ、わたしは手疵」、である。

この歌、「電報のように」息子の返事は簡にして要を得ている訳だ

から、むしろ歓迎すべきだが、どっこい母の心は「すげない」（つれない。愛想がない）となる。母の愛は計り知れないものだ。

・光子さんの歌集の中に特技なる皿回しの歌ひとつもなくて
八木橋洋子

短歌というより狂歌（滑稽和歌）と読んだ方がよかろう。事の起こりは全国大会における近藤光子さんのかくし芸。「皿回し」はその日の余興で披露されたもので、出席の皆が近藤光子さんの玄人跣足の妙技に度肝を抜かれたものだ。百年の伝統を持つ「香蘭」はさすがに多士済々である。八木橋さん、言ってくれますね。

・昨夜見し夢の居酒屋に記憶あり「雑魚屋」なる店いまも残るか
森田　徹

そのかみの鎌倉の虹（！）たる香山静子選者を女神のごとく崇拝する作者。一方で希代の飲兵衛でもある兄も、昨今は病みがちであると聞く。しかし夢の中でも居酒屋が出てくるのは、見果てぬ夢がまだ残っているせいだろう。

筆者も森田兄に負けず劣らずの飲兵衛だが、見る夢はおちょこ程度のもので己んぬる哉、兄よりずっと器が小さい。はてさてお互いが生きている内に九州男児同士が酌み交わせますかどうか。時にこちらの「邪馬台国の虹」たるご令室に恙なきや。

・今此処で乗るかやめるか「定時には来ないバス」とぞ添え書きのあり
山中　光枝

ん、と思わず首を捻った。「定時には来ないバス」という添え書きは誰の手になるものか。いくら洒落っ気があっても、まさかバス会社ではあるまいが、もしそうだとすればバス会社の天晴れな自己防衛にユーモア賞を贈りたい。

客の方でも「乗る、乗らない。乗らない、乗る」と呪文を唱えている内に、バスの方が痺れを切らしてやってくるかも知れない。「念仏100ぺん、バスおのずから見る」（読書百編義自ずから見る）は少し違ったか。

・雪が降る道玄坂に初雪がきみと歩みし渋谷の街に
鈴木　桂子

うれしいね、老いの皺を数えるような歌ばかり読まされる「香蘭」には、珍しいこてこての相聞歌。この一首について選評を書くのはヤボというものだ。間違っても嘘臭い、などと言ってはならなぬ。もともと愛だの恋だのは初めから嘘臭いものだから。ならば黙って胸に仕舞い、にっこり笑って通り過ぎよう。じゃあまた来月に！

・スリッパと言えどそれぞれ履き癖のありて家族のスリッパ並ぶ
飯島智恵子

この作者ならではと思わせる、手練れの歌である。難点の無いのが難、などとつまらぬ評をしても始まるまい。せめて「言えど」は「雖も」の方がよろしいんじゃございませんか、くらいは付言しておきましょうか。

・ある時は詐欺師のこころで歌を詠む上手な嘘がつけたらいいね
石井　雅子

さすがにベテランの発想は「鬼面人を驚かす」に十分ですね。その心は「歌は所詮は絵空事」という達観に立っていましょう。ま、中らずと雖も遠からず、である。ただわたくしメが図に乗ってお陰さまで「香蘭」は有能な詐欺師を多く抱えております、とでも言おうものならたちまち炎上でしょうな。

作品二、三　十首選

（六月号作品から）　桜井京子選

・仏花買う老爺よ生きているうちに妻にお花を贈りましたか
小笹岐美子

なんとも痛烈な問いかけである。妻孝行したい時には妻は無し、ということ。最近の統計によると日本人の平均寿命は、男性が八一・〇九歳、女性が八七・一四歳といわれている。多くの男性は妻に看取られて亡くなっていくことを想定しているが、周囲を見渡せばそうとは限らないことは明白である。生前に花を贈り、優しい言葉のひとつもかけていれば、妻の笑顔が見られたはずである。

とはいえ、夫婦のどちらが先に逝くとしても、生きているうちが花。死んでからでは遅すぎると作者は警告しているのだ。

・椅子に座しラジオ体操為すわれを誰が思いけむ　白梅ひらく
金子　幸子

一連の中にスタッフから体操を勧められる歌があり、介護施設でのひとこまであろう。年齢を重ねてかつてのように体が動かせなくなった作者。いったい何時の間にこんなに齢を重ねてしまったのか。

誰しもが避けられない老いを見つめて、切ない歌である。結句に置かれた白梅が笑っているように見えて、そこに僅かな救いがある。老いと向き合う日々はこれからも続くが、想定外は常にある。

・目まぐるしく昨日を終えてふわふわと今日は昨日の続きを生きる
竹本　幸子

昨日が終ったと思ったら今日が来て、すぐにまた明日になる、この調子ではあっという間に一生が終ってしまいそうだ。「ふわふわ」は、作者の感覚であろうが、今を生きている実感のないまま、流されていることに気づいたのだ。では何もしていないかというと、さにあらず。現役で忙しく働いている作者であるから、毎日が充実しているということでもあろう。ふわふわと、しかし、その積み重ねで今日があることを忘れまい。

・この世から時計をすべてなくしても人は生まれて人は死ぬべし
田中あさひ

いつも時間に追われ、時計を気にしながら生活しているが、この世から時計というものがなくなれば、どんなに気楽なことだろう、と一瞬思った歌。時計と時間をあたかも同義語のように錯覚しているからだが、確かに時計が無くなっても時が止まるわけではない。あるいは、この世のすべての時計の針を逆に回しても、過ぎ去った時間は戻って来ない。時は自然の摂理に従って進んでいるだけだ。

人もまたその流れの中で、生まれてから死ぬまで限られた時を天命に従って生きている。箴言的な詠み口の作品だが、この当たり前のことに気づくには、それなりの歳月が必要だったとも思わせる。

・波の音聴いて眼を閉づ　置き去りにしたるわたしを取り戻すため
能城　春美

毎日、公私ともに忙しくあちこち飛び回って暮らしている作者。ときには海辺にやって来て、ひとり波音に耳を傾けてみたいもの。

一字空きの後ろの三句以下が、いかにも格好がいい。否、格好が良すぎて演出過剰にも感じられる。わたしを置き去りにしたのは他ならぬわたし自身であり、自分で自分を詰って見せたものか。

現代では波音が聴きたくなれば、わざわざ海辺に出掛けなくても、ユーチューブなどでリアルに再生することができる。いわば偽物の波音ながら、作者はそれを聴いて、結構癒されているのだ。

・自分では何も変わっていないのにシニアパートと呼ばれたる春

藤田　祐恵

「シニア」とは「年長者。また上級生」「高齢者の意でも使う」とあり（「明鏡国語辞典」）、この歌の場合は「高齢者」の意味だろう。作者は自分を高齢者などとは思っておらず、大いに不満なのだ。「シニアパート」という耳触りのいい言葉をあてがって、実態を覆い隠そうとする使用者側の意図が透けて見える。

だが、辞書の用例では「元気なシニア」などとあり、老け込んでいるというわけではなさそうだ。きっと新たな春が始まっている。

・何がなし真面目な名前が欲しからんニセアカシアも蔓梅擬きも

藤本佐知子

アカシアはミモザとも呼ばれ、ニセアカシアは針槐（はりえんじゅ）とも呼ばれて、これをアカシアと呼ぶ向きもある。また葉が梅に似ているから梅擬き、葉と果実が梅擬きに似ていて蔓性だから蔓梅擬き。「擬き」はまがい物の意味である。何とも植物の名前はややこしい。

真面目な名前かどうかではないが、屁糞葛（くそかずら）、犬陰嚢（いぬのふくり）などという気の毒な名前もある。この歌は、植物の名前に着目した遊び心の楽しい歌である。

・日の経つに夫のにおいが消えてゆく家にわが身に　雪ふり積もる

安田　恵子

昨年、夫を亡くした作者。「香蘭」四月号の「近詠十五首〈からっぽの心〉」に挽歌が掲載されたが、この歌もその延長線上にある。

本来いるべき人がいなくなり、その喪失感はどれほど歌っても埋めがたいのである。雪が降れば、ともに眺めた窓辺に夫はもうおらず、夫のいない時間をこれから作者は一人で、積み重ねて行かねばならない。降り積もる雪が諦観を静かな決意に変えた歌である。

・散る花もこれから開く花もある出逢いと別れの春が来たりぬ

柏原　貞雄

春はまさしく出逢いと別れの季節。作者にどんな個人的事情があったかは歌われていないが、普遍的なところに手が届いている感じがする。良寛の辞世の句「散る桜残る桜も散る桜」を思い浮かべてもよい。後先はあれど、いずれは散ってゆく桜。心はずむ出逢いも、やがては必ず別れの時がおとずれる。そう思って見上げる桜だからいっそう美しいのだ。

・背伸びして女雛を飾った時もある娘と吾の四十三年

川久保百子

毎年、お雛まつりの季節になると、雛人形を出して飾り続けてきたのだろう。娘が幼い頃、上段にまだ手が届かない時もあったのに、などと母の思いはその時どきにさかのぼる。

母と娘にどんな歳月が過ぎたのか、あえかな感傷は残っても、過ぎてしまえば、その時間は長いようであっという間であったはず。そんな母と娘の四十三年を、お雛様は見つめ続けて来たのである。

村野次郎への旅（184）

昭和期の「香蘭」（十九）

千々和　久幸

前号に引き続き前月歌壇合評を読もう。

眞人　細井魚袋

田舎より夏の休みに上りこし初枝そだちて姿おちにける

蚊帳ごしに見たる青葉のあざやかさつむりたる目にまだのこり居る（病床にて）

（正太郎）（一）の歌は説明的で單に報告歌にすぎません。それだけで讀者の心をうつ何もないのです。

（二）の歌は一應意味は受取れますがどうも情がのつてゐない様で迫つて來る力が弱いとおもひます、下の句の表現が上の句に對してまだぬきさしならないところまで行つてゐないからではないでせうか。

（次郎）（一）が前評者の云ふが如く説明的であり報告歌に過ぎないことは作者も判つて居る筈である。樂に歌ふと云ふことは感動を抜きに事象を羅列することではない。（二）は（一）に比較すると大分見返してゐる。聊か心持を緊張さしている。然しほんとうは今一歩先のものを握らなくてはならない。

國民文学　川崎杜外

水盤に莖のび出でしやつがしら朝より見つつすがしとぞ思ふ

久々に梅雨のはれ間を日の照りて遠山の晴れを今日は見たるも

（廣治）二首共に作者の人柄を思はせるやうなをとなしい歌である。（一）の歌の結句をかうまで強く云ひ切る必要があつたであらうか。寧ろ素直にいつた方が効果があつたと思ふ。や、意識して歌つたところが見える。

（二）の歌の「はれ間を」「晴れを」重複したのも面白くないし同じやうなところで「を」の反覆も歌の格調を重くしてぎこちなく思はせる。「久々に」と云つてありながら又結句で「今日は見たるも」と再び同じやうなことを云つて歌を散漫にしてゐる。遠山の晴れと云ふ言葉もどうもすつきりしない。折角對象の面白いところを捕えながら表現に不純な點があると思ふ。

（次郎）短歌の構成を或程度に會得してゐる。この自己だけの既成の枠の中をやうやう満たしてゐる。自分の思ふままに枠を作つていつたり、或は其中から溢ふれ出る程の力があると云ふのではない。レールの上にやつと乗つかつてゐるトロッコでは食ひ足りないのである。

新設の「壺中の天地」が賑やかになった。今回は村野先生の「廣治の歌」を引いておく。

酒井氏は家事上の爲め作歌を随分永く休んでゐた。筏井、河野氏及び私などと同じ歩みを續けて來た中で氏の沈黙は寂しかつた。それが數年前北原先生吉植庄亮氏と樺太旅行の途次同氏をたづねられた。それでやうやく作歌をする氣持になつたらしい。

初めの中は風雨にさらされ土に蔽はれて今までの鑛脈が仲々見付からなかつた氏は倦まなかつた。昭和二年も半ばすぎた。其中に愛

弟を亡くされた。この哀悼の情はまともに歌に行つた。鑛脈は發見された。從來より更に大きい鑛脈である。今までのろのろ怠けてゐた私は驚いてしまつた。どうも私の鑛脈より素張らしいものらしい。

彼は日光九月號で斯う歌つてゐる。

まさ目には見ゆることなししかすがに面影そこに立つ思ひあり

うつし世はさびしけれども稟(うけ)がたき命なりけりふたたびはまた

軍服(ふく)のま子をあやしつつ日曜の家居たのしみし弟あはれ

身ひとりのうれひはあれど手まねく子を育てつつ思ひますべし（亡弟の妻に）

此頃流行の盆栽や小手先の藝ではない。さへぎるものなき人間苦のぢかな現はれである。或ものは新しい古いを通り越してゐる。私はこの歌を一讀して氏の亡弟を偲ぶ苦衷に自から涙を禁じ得ないのである。其と同時に氏の短歌に於ける心境を斯くまで押進めいつたかと云ふ喜びに溢れている。

作歌の転機をどう捉え、どこに見出すか。酒井氏の場合それはあまりにも寂しい現実に直面したことが期せずして転機になったのだった。

先生はそれを普遍化して詩の「鑛脈」だと書かれている。短歌は「悲劇の文脈」で輝くことはよく知られているが、これを「鑛脈」と表現したのは、如何にも先生短歌人らしい先生の比喩である。俗に「悲しみを力に変えよ（変えて）」というが、その具体例であろう。

ついでに先生の後記を覗いてみよう。

○残暑もすぎ朝出の靴の紐をむすびつつ庭の木梢の空はもう秋になつてゐる。これからみつしりした仕事が出來ると思ふ。

小生今月は自分の仕事が忙しかつたり風邪に冒されたりして怠けた。けれども各選者在京同人の爲めにどんどん編輯は運んで行つた。もう一人や二人手をぬいてもびくともしない自信はある。

○忙しい所を執筆された永田龍雄氏と杉浦女史の勞を多謝する。池上氏はめずらしく歌を送つてくれた。私は前記の爲めに歌が思ふ様にはいかなかつた。筏井氏も来月あたりは出詠するであらう。

日光への出詠は本號東海集に全部転載した。今後同人は盛に出詠する筈である。

○前に本誌に出詠した大熊長次郎氏其他古泉千樫氏の門に集まつた青垣會の人々が千樫氏の追悼號を出す筈である。同氏の書簡等お持の方は牛込區南榎町一五青垣會へ御貸與ありたし。

○九月歌會は出席者が少なかつたので歌會詠草は止めて合評會にした。合評者諸氏の他石橋青規君が見えた。

続いて橋本政一の後記から引く。

○「日光」が九月から北原白秋先生のもとに内容外觀ともに大いに刷新されて市上(ママ)に出た。既に詩友諸君の多くは手にされた事と思ふが、諸家先進のものも大いに嚴選されたとの事である。白秋先生は非常に繁多な御仕事の中に「日光」には殆んど獻身的努力を盡されてゐるが、同人末席の一人として涙ぐましいまでの感激を覺えてゐる。日光十月號には氣に懸かりながら身邊の慌しさに遂に心ならずも休んだが、近く捲土重來の意氣をもつてする積りでゐる。「日光」には香蘭詩友の中からも優秀な人々を合議の上同人として推薦する事になつてゐる。（後略）

続・酔風船（20）

千々和　久幸

さらば長嶋茂雄――いかな太陽もいつかは沈む

２０２５年６月４日の朝日新聞の社説は「長嶋さん逝く　時代の波動映した生涯」という見出しで、「天覧試合のあのファンの波動が、長嶋茂雄を生み、高度経済成長が、育てたんですね」と書いた。

たしかに長嶋茂雄は自らの与り知らぬところで「もはや戦後ではない」時代の象徴として生きねばならなかった。ちなみに「経済白書」が「もはや戦後ではない」（執筆者後藤誉之助）と書いたのは１９５６年である。どの時代も先導するシンボルが必要だ。大らかで底抜けに明るい長嶋の個性は、時代が要求する上昇気流を体現していた。だから野球選手長嶋は一野球界を越えて、日本の戦後を象徴するシンボルを演じ続けた。いや演じ続けねばならなかった。まさしく戦後の高度成長時代が必要としたシンボルであった。

昭和30年（１９５５）４月、わたしは神宮球場の明大側の学生席に居た。東京六大学野球の春のシーズンの明立一回戦を応援のために、である。わたしはこの４月に明治大法学部（英法科）に入学したばかりだった。春、秋のシーズン中の大学の講義は、早く終わること（！）になっていた。この日、刑法の教授は授業を30分早く切り上げ、「諸君、あとは神宮（球場）で会いましょう」で終わった。わたしは信濃町駅で電車を降り、キョロキョロしながら学生野球のメッカたる神宮球場に急いだ。

わたしは中学一年から高校一年まで野球部に在籍した。高校では一年上に仰木彬（後に近鉄の監督）が居た。仰木さんとは中学時代はライバル校だったが、高校では一緒になった。しかし高校でのわたしはもはや主力選手のパワーとスピードについて行けず、一年で野球部をドロップ・アウト。片や仰木選手は、一年時でもう九州随一の遊撃手と新聞が書いた（後に投手で四番）巷間、仰木選手は西鉄ライオンズの豊田遊撃手より守備は上という評判だった。

話が逸れた。そんなわたしが始めて見る六大学野球だった。試合開始前の打撃練習、シート・ノックを見て一驚した。立教の長嶋、また後に見た早稲田の森の打球の鋭さ、早さは群を抜いていた。加えて内野手（三塁手、遊撃手）の俊敏な動きと、一塁へ糸を引くような送球（肩の強さ）には目を見張った。逆立ちしてもオレは勝てない（わたしは内野手だった）と思わず体が震えた。

当時、立教には長嶋のほかに杉浦（投手）、本屋敷（遊撃手）、明治は秋山（投手）、土井（捕手）、近藤和、早稲田には木村（投手）、森（外野手）、慶応は藤田（投手）、佐々木信也、衆樹（外野手）など後に日本の野球界で活躍する錚錚たる名選手がいた。

明立戦の試合経過は忘れて仕舞ったが、両校のエールの交換で覚えた立教の校歌、応援歌は今でも歌える。とまれ当時の六大学野球はプロ野球より人気があった。そして長嶋は紛れもなく神宮のスーパー・スターだった。わたしは長嶋の訃報に接し、思わず「いかな太陽もいつかは沈む」と呟いていた。さはさりながら、まこと青春は過ぎやすし。さらば長嶋茂雄、さらばわが青春よ！

一頁公論（51）

もう一度訪ねたい場所
――沖縄の伊是名島――

大美賀一雅

もう一度訪ねたい場所は沖縄の伊是名島です。あれから二十数年が過ぎました。職場で一番の遊び仲間であるNさんの生まれ故郷へと、気の合う同僚八人で向かいました。那覇空港から小型機に乗り換え空路で数十分、低空飛行はサービスなのでしょうか。マイクロバスより狭い機内の小さな窓から本島のゴルフ場や深い青色の海に大きな魚影も見えました。エンジン音の大きな双発機はサトウキビ畑の脇の簡素な滑走路に着陸しました。周囲に建物は見えません。迎えのワゴン車には現地の観光をガイドしてくださる運転手が一人。伊是名に生まれ本島に渡って琉球国王となった尚円（しょうえん）ゆかりの地、水の逆流という伝説のある水田などを見て回り、宿に着くと大きな木版画が飾ってありました。ガジュマルの大木は名嘉睦稔さんの作品、妖怪「ぶたまじむん」物語の挿絵など。地元の方は夏の日中は暑さを避けて外に出ないそうです。

というわけで、民家も店もないビーチは貸切状態です。浅い海の底は白い砂、チンアナゴが……ソラスズメダイが……まるで水族館のようです。しばらくシュノーケリングを楽しんでいると水面にバッグが浮かんでいるのが見えました。波打ち際から離れた砂浜の上に置いた我々の荷物でした。引き潮のピークから徐々に徐々に潮が満ちて来ていたのです。海無し県から来た一行は潮の満ち引きなど思いの外でした。携帯電話の一台が水没。

宿の主人の船に乗ってグルクンを釣りに出かけました。魚群探知機に群れを捉えると急いで針を投入します。釣り上げては外して、手を返し再び投入します。あっという間に大漁です。港に戻ると包丁を借り、それらを捌いてつまみを作り、夕方からはビーチで酒盛りです。壮大な夕景色。焚き火の他に照明のない砂浜。気が付けば満天の星空。星座の形がわからぬほど暗い星までくっきり見えます。

帰省していることを聞きつけてN氏の友人で三線の名手が泡盛を下げてやってきました。パリ公演にも派遣されたという彼の演奏は曲に馴染みのない我々をも魅了します。名手の奏でる民謡を聴きながら輪になって踊り、食べたり飲んだり、浜の宴はいつまでもずっとずっと続くのでした。次の予定があるわけではない。今この時にどっぷりと浸って宴を楽しむ、日常とは別の時の流れがありました。曲はいつ終わるかわからないほど長く長く続きます。妖怪「ぶたまじむん」の民話もこの雰囲気の中なら現実味を増すでしょうか。（沖縄民謡を店のステージで三番まで聞きましたなどというのは不完全燃焼のような気がします。）細切れにした時間にあれこれを詰め込んで分刻みで生活している現代の日常が効率と引き換えに失ったものを見直したくなりました。

浦島太郎のように白髪の老人となっている今、伊是名島で体験した事は思い出の中の竜宮城での出来事の様です。外資も入って開発が始まったニュースも見ました。あの景色は最早見られないのかもしれません。でももう一度あの空気の中に、あのゆったりとした時の流れの中に行ってみたいのです。